



Title	A STUDY ON THE STROLLING AROUND NEIGHBORHOOD FOR LEISURE AND ITS RELATIONS WITH SPATIAL CONFIGURATION
Author(s)	Tedjo, Baskoro
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42135
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	テジョ バスコロ Tedjo Baskoro
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 9 8 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 11 年 11 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科 建築工学専攻
学 位 論 文 名	A STUDY ON THE STROLLING AROUND NEIGHBORHOOD FOR LEISURE AND ITS RELATIONS WITH SPATIAL CONFIGURATION (近隣におけるレジャーとしての歩き回り行動および空間配置との 関係に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 舟橋 國男 (副査) 教 授 柏原 士郎 教 授 吉田 勝行 教 授 鳴海 邦碩 助教授 鈴木 毅

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、住民が近隣において自由な時間に自発的に行う、レクリエーション活動のひとつとしての歩き回り行動の様態と空間的構造との関係を明らかにし、近隣コミュニティ生活改善に向けた環境整備の方策を見い出そうとするものであり、序および4部からなっている。

序では、研究の目的・背景・意義ならびに本研究の構成を述べている。

第1部では、まず研究対象地区の選定を検討し、屋外パブリック・スペースの空間構造と形成過程に注目して、自然発生的に住宅が建て込んで成立した近隣ならびに比較的新しく計画された近隣を選定することとし、大阪では前者として上新田地区、後者として高野台地区、バンドンでは前者としてカンボン・セクロア、後者としてブルムナス・サリジャダイの計4地区が選定されている。

次に、それぞれの近隣における観察調査に基づき、週日・土曜日・日曜日における各時間帯別歩き回り行動者の平均人数および年齢・性別・同伴者などの一般的な傾向と各地区における特徴を得ている。

第2部では、行動追跡ならびにインタビュー調査に基づき、歩き回りのルート、途上での予期せぬ出来事、立ち止まったり訪問する場所、行動目的、頻度、および行動時間等を明らかにしている。その結果、歩き回り行動は3タイプ(多様拡散的・特定の・随伴的)に分類されるとともに、行動の各種側面が地区の社会文化的環境条件と空間環境的ないくつかのリソースに依存する状況を解明している。

第3部では、スペース・シンタックス理論に基づく空間構造分析によって、歩き回り行動が発生しやすい場所の特徴を解明し、空間配置システムとの統合程度の高い場所はより多くの歩き回り行動が発生すること、視覚的パーミナビリティが高いほど歩き回り行動がより多く観察されるという傾向を見出している。

以上から、歩き回り行動を行う人々は、対人的により多くの視覚的アクセスと視覚的露出を求め、環境に対してより広い視野を求めていると推定されている。

第4部では、対象地区間の比較を行い、歩き回り行動における近隣屋外パブリック・オープンスペースの利用において、社会文化的相違が見られること、および、歩き回り行動における、特に人々の間での相互作用の重要性を確認

している。

以上に基づき、近隣における歩き回り行動をより促進し、コミュニティ生活の活性化を図るために、歩き回り行動にとっての環境リソース、空間配置システムとの統合程度の高い場所、および周辺環境へのより広い視野を与える場所等の創造の意義を論じ、即地的に、具体的な環境整備提案を行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、居住地における住民の日常的な生活行為の一つである歩き回り行動について、それが経費のかからないホームベースド・レクリエーションとして相当程度に行われている事実に基づき、歩き回り行動が余暇活動における心身機能の回復という第一義的な意義を有するのみならず、住民がその地域空間に接触して物理的・社会的環境を認識する機会を増大させており、現代の居住地における近隣地域社会の形成・活性化の基底的要件として重要な意義を有していることに注目している。この視点から歩き回り行動の実態を明らかにするとともに、その社会文化的特性ならびに空間的構造との関係を分析し、近隣コミュニティ生活改善に向けた環境整備の方策を見いだそうとしている。その主な成果は次の通りである。

(1)選定された調査対象地区それぞれの近隣について、週日・土曜日・日曜日における各時間帯別歩き回り行動者の平均人数および年齢・性別・同伴者などの一般的な傾向を得て、各地区における特徴を明らかにし、地区間の比較を行っている。すなわち、大阪ではバンドンとは逆に、自然発生的市街地よりも計画的住宅地において多くの歩き回り行動が観察され、また、大阪の方がバンドンより、高齢者の歩き回り行動や、単独での歩き回り行動が多いことを示している。

(2)歩き回り行動の頻度・行動時間・行動範囲ならびにそのルート・途上での予期せぬ出来事・立ち止まったり訪問する場所・行動目的等の詳細を各地区別に明らかにしている。その結果、歩き回り行動はその基本的な目的と行動内容により、3タイプ（多様拡散的・特定の・随伴的）に分類されるとともに、行動の各種側面が、地区の社会文化的環境条件と空間環境的ないくつかのリソース（ストレスからの逃避・子ども向け・運動・美的な質・社会性・自然探究等をアフォードする環境）に依存する様相を具体的に解明している。

(3)空間構造分析法としてのスペース・シンタックス理論を歩き回り行動に初めて適用し、歩き回り行動が発生しやすい場所の空間構造からみた特徴を解明し、当該地区の空間配置システムとの統合程度の高い場所はより多くの歩き回り行動が発生すること、視覚的パーミアビリティが高いほど歩き回り行動がより多く観察されるという傾向を見出している。以上から、歩き回り行動を行う人々は、対人的により多くの視覚的アクセスと視覚的露出を求め、環境に対してより広い視野を求めていると推定されている。

(4)対象地区間の比較に基づいて、歩き回り行動における近隣屋外パブリック・オープンスペースの利用において社会文化的相違が見られること、および、歩き回り行動における、特に人々の間での相互作用の重要性を確認している。

(5)以上に基づき、近隣におけるコミュニティ生活の活性化を図る視点から見て、歩き回り行動をより促進するための環境リソース、空間配置システムとの統合程度の高い場所、および周辺環境へのより広い視野を与える場所等の創造の意義を論じ、即地的に、具体的な環境整備提案を示している。

以上のように、本論文は居住地における住民の歩き回り行動の実態、その社会文化的特性ならびに空間的構造との関係を明らかにしており、建築工学、特に、環境行動論の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。